

光明 第五卷第四号

大我に生きよ

合掌して運命に随う者

法兄様、苦しくはありませんか。法姉様、辛くはございませんか。生きることの重荷。何という重荷を負わねばならぬ事でしょうか。

重荷をおうて生きる。否、生きることそれ自身が重荷であります。

別れたくないものとも別れねばなりません。

死んではならないものも死んでゆきます。

別れたくて仕方のないものも別れ得ないで、憎みあいながら共に暮さねばなりません。地上の悲しい呪わしい怨憎会苦であります。

希望を抱いて勇しく進んでいても、事志と違い、長い過ぎこし方をふりかえる時、流れ流れて来た経路はあまりに痛ましくも、愚痴の種であります。

末は博士か大臣かと輝く前途に胸おどらした過ぎし日の秀才は、今、小さい古ぼけた事務机で灰色なその日その日を一小役人として生きています。

金満家に、それは大部分の人の志願でしょう。けれども、人の大部分は貧しいままに労働を売って、貧しい晚餐の一ぱいの酒に自分の全てを忘れようとしています。

妻の冷たさに泣く男、夫の心変わりに気も狂乱な女。子供に去られる親、親に棄てられた子供。

それぞれの人によって生きて行かねばならぬ苦しみ。その苦しみからのがれたい。その苦しさから救われたい！

子は子で、親は親で、夫は夫で、妻は妻で、皆、各々がこの苦からのがれたい。人はこの苦からのがれたいために、日々、夜々、考え、働いています。金があつたらのがられるか。勉強したら、位を得たら、妻があつたら、夫があつたら、山に行つたら、仕事を変えたら、都会に出たら、田舎に行つたら、子供があつたら、子供さえなかつたらと、もがきながら墓場へくくと急いでいます。

のがれられるでしょうか。老人はよく言います。「苦が変るばかりじゃ。」深い知慧から出たほんとうの言葉であります。

生きることそれ自身が苦であります。生きることがあつてそれに苦がつけ加えられていないのではなくて、生きていくということが苦なのであります。

彼女の夫はふとしたことから酒を飲みはじめました。そうして妻たる彼女に温い言葉一つかけないようになつた頃には、外に女を幾人も弄んでいました。男は毎夜毎夜、夜明けになつてかえつて来ます。彼女は去りたいと考えながらも、三人の子供にひかされて、泣いて誠めもし、願ひもしました。けれども男の生活はそのまま十年も続きました。嫉妬、呪い、絶望、女は夫をのみ恨みました。

けれども彼女の心の内にも光のひらめく時がありました。彼女は今までと違つた気持で寺に参りはじめたのでした。聞きたびに、彼女の心眼は開けて来ました。そうして泣く涙のままが、感謝の涙に変わりました。

一応は、夫が悪いのです。けれども、一度ほんとうに考えることが与えられた時、夫の悪いということが、彼女の運命であり、業であり、生活なのであります。そうして泣きながらも、その業をこそ目をつけたまいし大悲のみ親の呼び声に目覚めた時、初めて、合掌して運命の前に脆き、運命に随う自由な自分を見出すことが出来ました。

合掌して運命に従うもの、それこそは大悲のみ親に抱きとられた人であります。彼女の生活はみ仏中心の生活に変わりました。三年五年、夫はやはり放蕩をつづけず。彼女は兎角泣きながらも、その涙を浄化されて十年は過ぎました。

お光は彼女を通して夫へ、知らず知らずの内に働いていました。そうして、男は変わって来ました。夏の夕、涼しい風を受けながら、やや老いかけた彼女と夫は、念仏を称えながら共に夕食をとる時が来ました。

全て生きることが業であります。業に縁がふれては新しい私を刻々に生活して行きます。

様々な苦しさを生活して行くことは、堪えがたいことではありませんけれども、その苦しさをまともに見つめて行く者は、いづれ、涙のままが恩寵に変わる時が来ねばなりません。

親と別れることでもいい、真に泣いて親と別れ得た者は、ほんとうに愛別離苦、わかれの辛さを知らされて、魂はより深い世界を知って来ます。

如何なる苦しさに出会っても、暴力をふるって運命にはむかおうとしてはなりません。

別れなければならぬ者は、どうしても別れねばならぬ。会わねばならぬ者はどうしても会わねばならぬ。

静かに合掌して、魂の消え入るような苦しきの内にも、素直に運命に随うことの出来るもののみ、それはやがてみ親の大慈大悲の温い胸の内に抱かれて、運命を感謝し得る時が来ます。

み親の温い胸に抱かれた者のみが、苦しいままの運命の前に合掌して素直に従うことが出来ましょう。

合掌して運命に生きる者

昔、インドのセイロン島に美しいケラニヤという国があつた。その王をチッサと言つて、至つて仏法を仰信するお方であつた。毎日宮廷にはたくさんのお僧を入れて尊い供養を行われた。その頃この国にケラニヤ僧正と呼ばれる高僧があつた。国王は深く僧正に帰依して王の妃と共に厚く供養していました。

けれどもこの王宮の内に何時か悪魔が巣くうて来た。それは王の弟が年若な美しい王の妃に道ならぬ恋をしたことである。妃と、王弟とは人知れず不義の恋路にわけ入つて、ヤシの葉かおる花園に甘い私語を交していた。何時しか王の耳に入ったが、寛大な王は、妃の美しさに心ひかれる王は、ただ王の弟を宮門の外に追い出したのみで事をすましたのであつた。

宮廷から追われた王弟は妃のことが忘れられない。狂う心はいや増すばかりであった。恐しいたくらみは考えられた。王弟は小賢い一人の男を僧の姿に装わせて、黄い衣の下には燃ゆる思いの艶書を持たせて、王宮の門に立たせた。間もなくケラニヤ僧正は何時もの供養を受けに来た。にせの比丘も僧正の後につづいて王と王妃に迎えられて王宮に案内された。僧正はにせの沙門を見て、何の不審もおこさない。王は又、僧正の弟子だと思っていた。

沈黙の内に供養はおわった。にせの比丘は何時か隙を見たら、王弟から頼まれた手紙を妃に渡そうとした。けれどもその暇はない。僧正の法話も終わった。けれども手渡しする隙は与えられない。僧正は立つて王宮を出ようとする。王弟の使いはあせつたけれどももう玄関に立った。今は仕方もなく思いきつて人知れず手紙をば王妃の前に落した。「バター」、それと知った王はすぐその艶書を拾い上げた。

王宮にかえった王はその手紙を開いて見た。王の顔は見るみる火のように怒りに燃えた。手紙の宛名は王妃、その差出人はケラニヤ僧正、筆のくせまで僧正そのまま。あわれ切なき蜜より甘き恋のうつつたえではないか。

おのれ憎き破倫の坊主、かかる不埒な装われた悪魔とは知らなかった。怒りに燃えた王は兵を送つて、あわれ僧正をめし取った。

刑場には大釜に油がぐらぐらと煮えている。僧正は煮油の中に入れられて煮殺しの極刑を受けねばならぬ。

僧正の口からは一言半句の弁明もない。静かに観念の眼は閉じられた。

最大の試鍊。

真剣の絶頂。生温い全てが役立つたぬ。

必死無二の心観、最後の止観に突入した偉大なる僧正。

迷えるか、然らず。恐れたるか、然らず。

怒れるか、然らず、恨めるか、然らず。

ぐらぐらと煮えあがる油の音も他処に、僧正の魂は、安養の世界から流れ来る光明の一道を見つめて、永劫の輪廻を今はなれて、真如の彼岸に立っている。

僧正は悠々とたぎり立つ油の釜に入れられた。

その時、僧正の口からは、いわゆる「鼎鑊上の偈」と言われる九十八首の偈は声高く唱えられた。

九十八首の偈、それは全て仏法を勧める勸道の偈である。恨みもなければ弁解もない。ただ生死の迷い、亡びゆく人の身の目覚めを説いて、さとりに入れ、と教え勧めているばかりである。

全ての試鍊に打ちかかって不退の努力を続けたい。

自己の全てを知った者は自分の小細工を使わずに、自分の全てをもつてぶつつかる。自分の全体をなげかけて行く者には、小我のはからいもなければ、善もいらぬ。ただ、自我の全てを棄てて、大きなはからいの中に生きる。

無我の生活がここから生れる。

運命の前に合掌して。

迷える者

人は皆西へ／＼と進む。路がなければ路をつける。河があれば橋をかける。一夜／＼の仮舎をかるためには家をつくる。便をもよおすから便所を作って、それを使う。体がよごれるから風呂を造る。寒いから着物を作る。腹が減るから食事をとる。

おい、人間、お前は長い旅の途中で、初めの目的を忘れはせぬかい。

おい、人間、皆、腰をかけているではないか。

橋まで行つて橋のみきれいにしているもの、渡ることを忘れて。

いい家がよい。けれどもそれは一夜の宿ではないか。夜があけたら出て行くのだ。

何時まで着物の品さだめをする。着物も生命ではない。寒くなかつたら出てゆくがいい。

便をもよおす時は便所がいい。便所から出たら歩くがいい。

何故に西へ／＼と行くことを忘れたのだ。そうして道草を食つて進まないのだ。人間よ。お前たちがしていることは複雑だ。容易に何が何やらわからないほどこみ入つて来た。けれどもこみ入れればこみ入るだけ、お前はお前の魂の本願を忘れるのだ。町に買物に出た者が買物を忘れてあきれているように。

なんぼ複雑でも、もとは単純なものであつたのだ。美しい雞が歩いているけれどもそれはもと小さい一個の卵であつた。

お前は、お前の今のこみ入つたお前たちの社会に目をつけていて、その複雑をもとの単純なものにかえすことを忘れたのだ。

歩くことを忘れたのだ。そうして歩くための全ての方便に氣をとられてしまつて。そうして毎日／＼、電柱と電線を長く敷いていても、一度も電流を通じることを忘れていたら何のことだかわからぬではないか。

魂の本願を忘れた者は、もつと／＼考えて見るがいい。お前は悲観したり、煩悶したり、狂つたりするだろう。けれどもそれでも平氣でいるよりは賢い。便所に行きたいときに、風呂場を美しく飾ることに苦しんでいる者よりは尊い。もつと苦しむがよい。

お前は魂のほんとうの願いを忘れたのは昨日や今日ではない。ずっとずっと前、生れる前から忘れていたのだ。

目をさまして泣くがいい。

けれどももう一つ、もつと悲しいことをお前に言わねばならぬ。

それは今お前が目をさましてお前の本願を知ろうとしても、知る力のなくなつたことだ。

更にもし、お前よりもつと賢い者に、お前の本願を知らされたところで、お前はその本願につき進む力と根氣のなくなつていゝことだ。

私は今、全てをお前に言うまい。むしろお前はそのままに迷い続けたがいいかも知れぬ。しかし考えて見るがよい。

それでは絶望だと言うのか。そうだ、目がさめたら絶望だ。

何？「絶望の彼方に無限の広野あり」だと。
そんなことをお前に今教えたくない。
お前は、その言葉に腰をかけて又道草を食って怠けるから。
教えなくてもきつとくお前は一度、絶望だと知る時が来るよ。

死念仏

死念仏を称えている法義の道楽者もまた、魂の願いを忘れている者である。

「今日は寒いから学校に行くな。お菓子かほしいか、買ってやろう。よいよい借金が出来たら払ってやろう。仕事なんかすれば手が荒れる。旅に出しては寂しくて仕方がない。何をしなくてもいい、遊んでいよ。」

甘ったるい親のような、こんな温情主義のみ仏だろうか。観世音菩薩の慈悲に大勢至菩薩の智慧、み親は慈悲と智慧とを持ちたまう。如来の慈悲を知って、智慧を知らぬ者。何という真剣味のない法義道楽者。法義道楽者が増えれば、家も滅ぶ。国も滅ぶ。

罪深き者たることをほんとうに真剣に知らぬ者と、溺るゝ自己を極重悪人の名によつて社会的に救おうとする者と、親鸞聖人が強い意志の方であつたことを知らぬ者と、未来はみ仏中心、この世は金中心と、二重に自分の使える者と、真諦と俗諦とは全く別なものでありながら、相即不離であることを知らぬ者とは、死念仏を享樂している者である。

死念仏の行者には大安心と、常行大悲のひらめきがない。末通つた、最大な、力となりたまうみ仏たることを知らない。彼等は念々刻々の歩みを如来のおはからいにまかせることが出来ない。念仏と共に寝ね、念仏と共に起き、念仏と共に働く報謝の生活がない。着る物も、食う物も、家も、如来の御用物たることを知らぬ。身を粉にしても恩を報ずる憶念の信がない。世間の思惑や、利害のためにのみ動く。この身は極重悪人だと言うけれども、如来のみ光に自分を照したことは一度もない。法を聞く陶酔の享樂はあるが、悪人自覚のひきしまった生活がない。

何という悲しい俗風だろう。何という真宗の醜顔だろう。信者安心者と称する者はあまりに多い。そうしてみ仏によつて生きた者はあまりに少い。死念仏を骨董のように弄んでいる念仏道楽者。一人増せば国が哀える。村が乱れる。家が乱れる。死念仏をいじくる人も、建物も、皆、壊滅に急ぐ。不死の神法南無阿弥陀仏は死の中に存在しない。

親鸞聖人のあの大人格を通さずに真宗はない。み仏の大慈悲は人格を通してのみ聞くことが出来る。国賊道鏡を以つて親鸞聖人と置き換えることは出来ない。み仏に生きた人格を通してのみ、み仏の名号を聞いて信心歡喜することが出来る。人格においては宗教はない。人格を問わずに法を言う者と、善知識の言葉を頼みにする者とは、共に死念仏の行者である。

高い人格にふれてこそ我が信仰生活の向上徹底はある。そうして、説教者の言葉のみ聞いて握る者は、み仏と我との直接の約束を忘れている。仏を信ずるのでなくて人を信ずるのである。かくて我々は、走りたい時に走り、笑いたい時に笑い、食いたい

時に食い、眠りたい時に眠り、黙っていたい時に黙っており、叫びたい時に叫びつつ、しかもそれが不退の歩みでなければならぬ。自力の迷いによるにあらずして、大我（み仏）のはからいにまかせて、強いられた苦痛なく、全ての障碍の碎けゆく白道の上を歩ませて頂かねばならぬ。

真に求めよ

永久に求めよ。（私の魂に告げる）

永久に求めよ。（諸法兄弟に捧ぐ）

真の孝行者は如何につとめはげむも自らを孝行者とは思わぬ。信者になったと思ふ心、退転である。事実を見る。頭で知っている間はわかつたらやめる。心情からつき出でた時、いくら行つても聞く。何十回、何百回、一生涯求める。求めても求めても足らぬところに、真に求め得た生活が生れる。

武田勝頼の首を見て、足にかけて罵つた信長と、
仏前に香をたいて

「君と共に武功の物語りせんと思ひしに……」

と泣きし家康と、

さても何れが強いのか。

乃木大将の宇品港の涙。

孤児貧兒を見て流すペスタロッチの涙。

ああ、涙の涸れたる者よ。

涙は涙に通ず。

真実の胸から真実の胸に、人と人をつなぐ涙。

汝の涙は何故かれたか。

心情の上におおわれた蓋を、如来のみ手でとつてもらえ。

あふれ出る無形の涙、五劫永劫、法蔵菩薩から続く涙。

涙の大会を送る

感激に始まり感激に終る

三月十八日。

昨夜小河内支部の講演に行きて今朝かえる。今日は五周年記念大会について協議会のある日。村内組長様方、村会議員諸氏、村長様初め役場吏員の方々、その他の有志、相ついで来会下さる。

午後一時開会。私は先ず私の所信を大胆に述べた。

「光明団は五周年を迎えました。そうしてただ一村の問題ではなくなりました。私一人の事業ではなくなりました。けれども私は村教育の重任のある身、皆様方は私に夜間と日曜とを光明団に使うことを快く許してくれるでしょうか。私はただ如來の御慈悲のために生きさせて頂きます。何を棄てても有縁の友にこの歡喜を分たねばなりません。本村の底から念仏の声が湧き出でてのみ、全ての事業も、教育も生きて来ます。もし私が念仏の子たることがお気に召さねば、学校はひかして頂きます。けれどもたとえ車挽いても念仏をこの村にもつと徹底させない以上、去らないかも知れません。」

皆様のそれに対する御意見は、満場一致で

「今、目覚めかけたただけである。どうぞやめるところではない、益々盛んにやつてくれ。」

一人の反対意見なく満場一致。ああ、満場一致念仏なればこそ、重ねて言う。

一人の反対意見なく満場一致。ああ、満場一致念仏なればこそ。

光明団へ反対し、住岡を攻撃する者、それは直ちに我々を辱めるものと取ろう、との意見も出る。

意気天を衝き、話の花咲きて、嬉しい感激の座談、二時間に渉る。次に、

「光明団と学校と兼ね持つ私に、学校にてはかく勤めよの御注意があれば。」

一つの注文も、御注意もない。何という御信用だろう。どうして学校がゆるがせにならうぞ。

「然れば、五周年記念大会は可なり大きな計画を持っています。皆様にそれぞれ役員になって働いて戴くことが出来ましようか。」

何で異論があるう。直ちに山本村長以下六名の総務はあげられた。村内ほとんど全部の中樞的人物は悉く役員に決定されて仕事の全部はその手に渡された。

経費予算の議定、仕事、準備、事務の分担で日はとつぷり暮れてしまった。

挙村一致、堂々たる五周年大会の幕は開かれんとす。

幸なる日よ、来る日来る日を不安に待った講師から電報、広島支部から電報、愈々三十日三十一日の両日、仏教済世軍總裁真田増丸先生御来会に決定する。

苦しかった五ヶ年間、幾度泣いたろう。幾度棄てようと思つたであろう。

食うことさえ出来まいと思う月もあった。大海の棄小舟、全てに見放されたような淋しさの内にペンを取った月もあった。けれども、やっぱり強く／＼はからわれてあつたのだ。ただ力となりたまいしはお光であつた。

「一生あらゆる苦しきの中に、ただ一人、み光にふれて永劫の生命を知つて下されば足りる。」

それが、私の魂の礎だつた。

「継続は力なり。」

私はずつと前に言つた。再び思い出せる。

いい修養を初める。けれどもそれがたつた二三日か、二三ヶ月かでおわると、それがどんないいことだろうと何にもならぬ。

「信は力なり」

我は刻々に変化する水泡の如き心の持ち主、そのわれの内にこそ如来は生きてまう。ほんとに全てはお光のなさしめたまうところである。

「われ生くるにあらず。如来我にありて活く。」

全ての生ぬるい、いい加減な、思想や世渡りにその日／＼を費していることが一日続けば一日だけの損失である。真実に！ 真実に！ 絶えざる生命の願いに、生ききろうとする者は、我の内に白熱したまう如来の本願力に、不可思議の力と感謝とを与えたまうを知る。

如来は我を我として生かしたまう。

如来の光明の我が魂の底を流れたまうを体験したもののみ、生命の不退の創造の絶対自由を見出される。

我生くるにあらず。如来我にありて生きたまう。

髪の毛の先、足の爪の内、煩惱に汚れあかづきたる魂こそ、それこそ如来の白熱したまう。

電燈のタングステンの線。我はこれタングステンの線、如来の電流流れて、白く輝く時、電燈は夜を照らす光である。

タングステンは自ら光るにあらず、電流ながれて、光るのみ。

電線なくしてどこにか電流があるう。貪欲、瞋恚のその内に、流れたまうは如来、貪欲瞋恚のそのままを生かしたまう。我は輝くにあらず。如来我が内に輝きたまう。何という力だ。義（はからい）なきままこそ最大の義（はからい）である。我を棄てて、小我の迷妄をはなれて、我を棄てさせられて、大我に生かしたまう。

我は現にこれ罪悪生死の凡夫、造る所作、罪ならざるはなく、妥協も許さず、言いわけもいらず、念々これ地獄の業因、かつて一善もない。

善を求め、真実を願ひ、恩寵に感激し、この心の中に懺悔の湧く、これ一つとして如来の慈悲によらないものはない。やまんとしてやめる能わず、棄てんとして棄てる能わず、ただはからわれて湧き出づるままに、念仏より外に他の善も要にあらず、悪もおそるるに足らないままに、やむにやまれぬ念願に従つて生きてゆくこそ、私のほんとの道なのだ。

嗚呼、あれ見よ！ ポツツ／＼と永劫消えない燈の数は増して行く。

何という嬉しさだろう。又一人、又一人、仏の子が出来る。
ああ五周年、全ては償われた。
拳村一致、大会の日は多忙の内に近づく。

三月二十七日、二十八日、

本村五百戸を三等分して、準備と後始末に出て下さる。

養専寺の本堂に掛座が出来る。緑門が出来る。小さき町の装飾。会場内外の飾り付け、三日間不眠不休の人さえある。「済みませぬ〜。毎日〜。」幾十回くり返しても足らぬ。

何故にあのたくさんな人たちは忙しい体を持ちながら、ソロバンを弾かないで働いて下さる。又しても感激の涙がこぼれる。

愛する青年団員諸兄は、先日はポスター百二十枚をはるために自ら進んで出かけて下さる。それに今日は自転車宣伝隊を組織して、広島に、加計町に、東北部に、三隊に分れて勢いよく四十台が飛んで行く。

かくて大会の全ての準備は了つた。残る問題はただ天候。会う人毎の口から「どうぞお天気がよければ……」とそればかり。

二十九日の朝は来た。昨夜来の雨、何となく雲ゆきが悪い。雨はやんだ。不思議に天候が変わってくる。開会前にはすっかりよくなつた。初日にもかかわらず会場は来会者でいっぱいになる。晴れ渡つた空には煙火が勢よくパチパチと響く。橋本晃勝法兄と私とが壇に立つ。

会場の内外、電燈、昼のように輝く。夜の講演も終る。

三十日よいよ大会の日が来た。

朝から参詣者がつめかける。

午前九時半、真田先生、来会せらる。

来る。来る。人が人が。またたく暇に会場はつぶれる。会場の外、人の波で動きがとれぬ。その教、数千。

やむなく会場係は第二会場を心配された。けれども幾分も收容されぬ。

勤式。団員の十二礼拝誦。国歌の合唱で開会となる。

「ただ今より五周年大会を開きます。我が光明団はただ感激によつて生れ、感激によつて育つて行くのみで……」

そのまま涙にくれて無言の壇上を去る。やがて真田先生の講演は始まる。

何という静かな、そして盛んな大会だろうか。底力のある感動が会場にみなぎる。

次に各支部の法兄姉立つて熱烈に叫ぶ。その間、真田先生は第二会場にて講演せらる。

涙の大会。又しても涙が流れる。どうしても泣ける。事毎に私の魂は底から感謝につき動かされる。国歌を高唱して広島支部が来た時、互に見合わす顔と顔、ただ結ぶものは無言の涙であつた。やがて十一の諸法兄姉のみ霊の前に追弔法会は営まれる。

白木の位牌の前、香煙縷々として昇る。森重閑月師導師となつて登壇、読経の声腸を断つ。やがて各支部の弔辞、生ける友にも言う如く思わず袖をしぼる。追弔の哀しき歌を合唱し、遺族、各支部代表の焼香を了えて追弔会はおわる。

続いて真田先生の御講演を聞いて昼の会をおわる。夜に入れば早くも会場は立錐の余地なく、先生の講演はいよいよさえて幾度か割れんばかりの拍手、国歌合唱裡に散会する。

三十一日、夜あくるや否や、人々は朝の会に急ぐ。天気いよいよ晴朗。何という有難い講演なのだろうか。一言一句人の肺腑をつき、涙なくしては聞き得ない。酔つたのでもない。情をやたらにそそられたのでもない。

朝の会はおわつても人々は去らない。ポップポツ数を増して会場にすしづめの光景である。三村氏、坂本氏、橋本氏、かわるがわる立つて熱弁振り、途中、濟世軍歌及び光明国歌を斉唱して、真田先生の講演となる。明確な純一無雑な信仰を説き、徹底せる報謝の生活を叫び、政治にふれ、吾人の使命を絶叫する先生、説く人もなく聴く人もなく、会場もなく、時間も知らず、全てこれ融和して一つの三昧あるのみ。「鞍上人なく、鞍下馬なし。」

光明団大会は先生をしてこの講演をなさしめた。坂本氏は言う「先生の今日の如き講演は大都会に於いてもあり得ない。」何という恵まれた大会ぞ。先生、初に、あまりに大会すぎる、と言われる。けれど、「静かな盛んな大会」と言われる。三十一日の昼の講演、如何なる者も心の底からゆり動かされた。

まさに終りを告げんとする夜の大会も無事にすんだ。四月一日の朝、名残りの講演である。有り難い力のこもつた最後の獅子吼もおわる。

午後一時半、堵列して国歌を高唱して先生を送る。万才万才と連呼する内に自動車は動く。先生、車中帽子をふつて又万才を叫ぶ。自動車は峠にかくれた。

多人数にて会場の整理もおわり、人散りつくして、温い春の陽は静かな田園を流れる。

大会は終つた。集まる数千の人の胸の内に様々な深い何物かを残して、五周年大会は了つた。

皆しつかりやろうではないか。色々な意味で固い団結を必要とする。

時代は全て多数を以つて支配しようとする。悪い意味の徒党をいうのではなくて、真実を以つて結ばれた健全な団体こそ真の力である。

量より質、烏合の大衆は集り易く散じ易い。私たちはあながちに大数を誇りたいとは思わぬ。けれどももつともつと太らせねばならぬ。

希わくば法兄法姉立つて陣頭に立ちたまえ。念願を持って振り立つ時、必らずその前に障碍が現われる。これを衝き破ることはあまりに易くして、しかも突破する者はあまりに少ない。恐しい山のように、峻しい巖のように、魔王のように、私たちの前

に現れて立つ。けれど勇を鼓して振り進めば泡のように崩れる。唯、一呼吸である。小細工をやめて、全我をもつて身をもつて、死を決して。突破する。その前に何の我を妨ぐる障碍があろう。

一人。一人をゆりおこせ。本団は如何なる人を求めるかは法兄法姉の智慧に訴える。健全なる倍加運動に参加して下さい。一人は一人を目覚めさせよう。そうしてあらゆる邪教を追いはらわねばならぬ。真実の宗教によるにあらずしては人を徹底的に救うことは出来ぬ。人それぞれが真実に生きずしては家庭も村も国家も救うことは出来ぬ。み仏に救われたる信の力を以つて、まず隣人の一人を救わねばならぬ。そうして来たるべき日、全ての人類が救われねばならぬ。大同団結して、腐敗したる社会におし出て行こう。

終わりに「至誠は反対の統一なり」の一句を借り来つて法兄姉におくる。

至誠とは小我の迷いによるにあらず。仏に生きたる信心をさしておく。